編集委員会から

オープンアクセスメガジャーナル

前回に続いて著作権およびオープンアクセスジャーナルの話題です.

オープンアクセスメガジャーナル（OAMJ）という言葉を聞いたことはありますか？

メガ（Mega）は論文数から来ています．ちなみに最も有名な（というか先駆的な）OAMJ である PLOS ONE には年間に約 3 万論文が掲載されているそうです.

（JJFE は年間論文数 40 弱ですからオープンアクセスナノジャーナルと定義するべきでしょうか.）

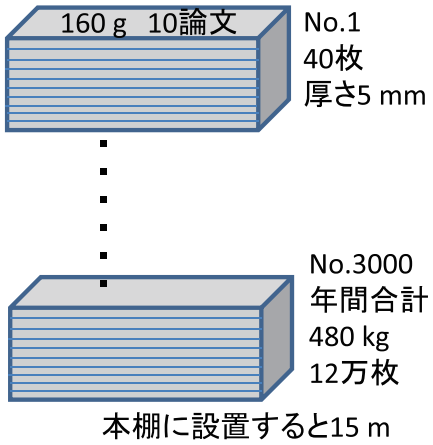
もちろん PLOS ONE は最初から OAMJ と呼ばれたわけではなく，年間論文も 1000 程度から毎年のように増加して 3 万編近くに到達しています.

このような OAMJ について“学術情報流通の未来かゴミ捨て場か? The future of scholarly communication or academic dumping ground?”という論文が最近出版されています．その他にも OAMJ については，いろいろな議論がされているようです.

PLOS ONE の特徴は広い範囲の学問分野に対応し，審査は“technically sound”のみで行われ，論文の重要性は読者が決めるとしています（the importance of any particular paper are then made after publication by the readership）.

もちろん，冊子体の学術雑誌では 3 万論文を掲載することはできません．OAMJ は，インターネットがあってはじめて成立する概念です.

1 論文平均 8 頁（=A4 4 枚）とすると 1 年間で 4×3 万=12 万枚　A4 1 枚は約 4g なので 48万 g=480 kg となります（表紙は考慮せず）．1 冊の厚さを 5 mm とすると本棚に設置するためには 15 m 必要です.



OAMJ は現在，以下のように定義されています.

・Big publishing volume or aiming for it
・Peer review of scientific soundness only
・Broad subject area
・Full open access with APC（article-processing charge）

（APC は JJFE では掲載料 page charge と表現しています）.

PLOS ONE 以外にも，この数年でいくつかの OAMJ がスタートしています.

さて，OAMJ は今後，どうなるのでしょうか.

（海外からの投稿問い合わせは増えていますが, JJFE がすぐにも OAMJ になることはなさそうです.）

References

Spezi, V., et al. (2017). Open-Access mega-journals: The future of scholarly communication or academic dumping ground? A review. Journal of Documentation, 73(2), 263-283.

（山口大学　山本修一）